日立市のケアラー支援についての提案

茨城キリスト教大学生活科学部心理福祉学科　藤島ゼミ

学生プロジェクト2024　最終報告会(2025.2.14)

目次

1.研究の背景と目的

2.研究方法

3.提案A　（1）調査の経過

（2）調査の結果

（3）提案の内容

4.提案B　（1）調査の経過

（2）調査の結果

（3）提案の内容

5.まとめ

研究の背景と目的

【背景】

- 全国的にはケアを必要とする人に必ずしも十分な支援が届いていないという課題が指摘されている。介護は家庭内のことであり、支援の必要性の自覚のしづらさや訴えづらさなどニーズ発見の課題があるだけでなく、人材不足により十分なケアの確保が難しく適切な支援になかなか結びつきにくいといったマッチングの課題があるとされている。

【目的】

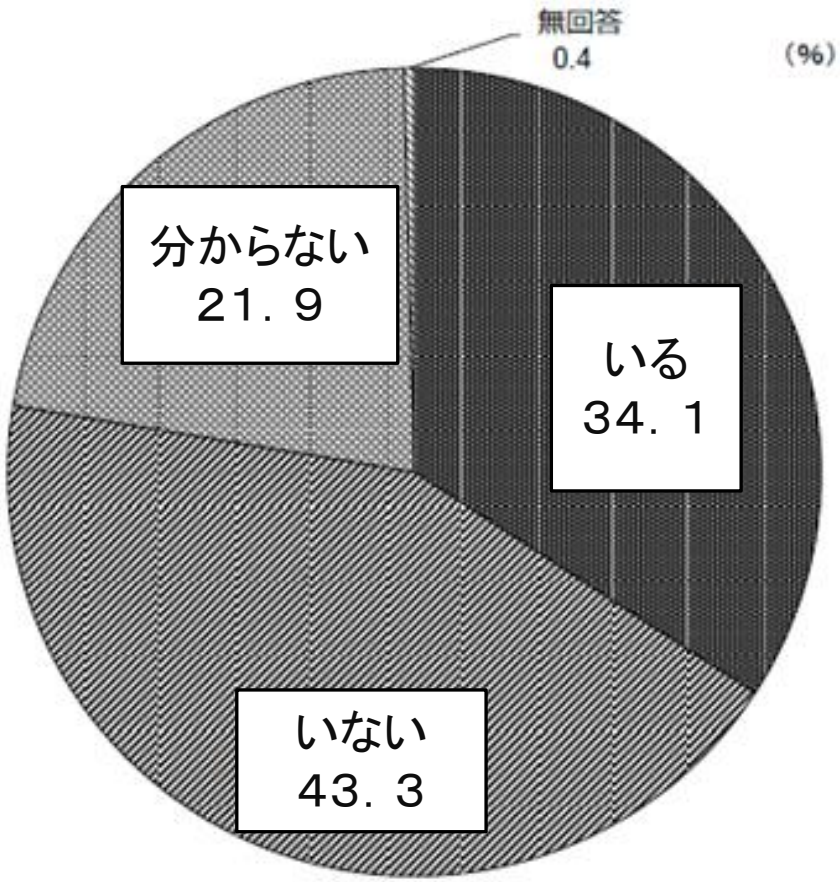
- 全国的に課題となっているダブルケアやヤングケアラー、ビジネスケアラーなどの用語で語られている無償で家族の介護を支えるようなケアラーへの支援について、日立市の現状や課題を明らかにすることで支援につながる提案を検討したい。

図1　ヤングケアラーの定義に該当すると思われる子供の有無

「いる」と回答した学校
→34．1%

「分からない」と回答した学校
→21．9%

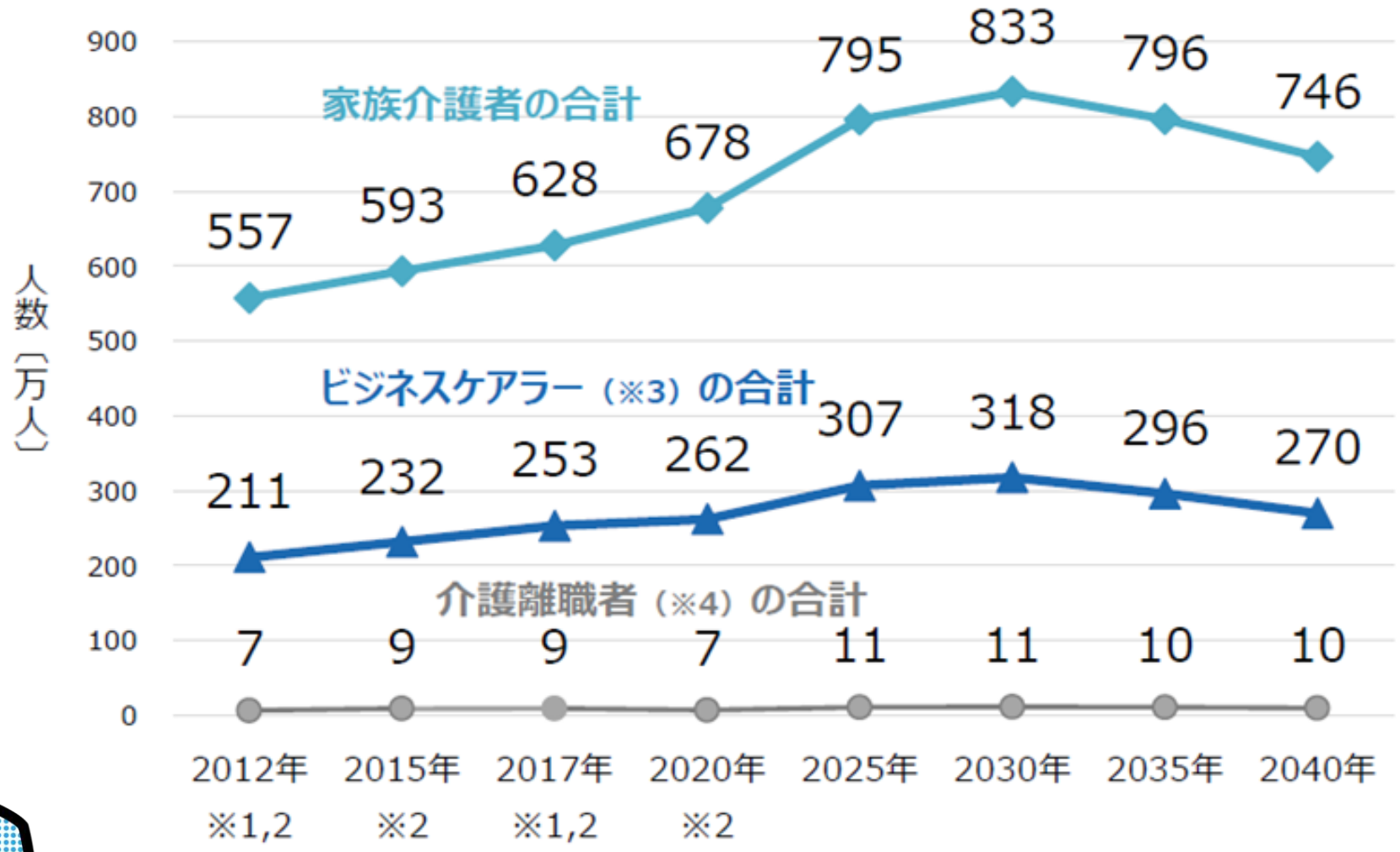
合わせて半数を超えている！



出典

『令和3年度こども・子育て支援推進調査研究事業　ヤングケアラーの実態に関する調査研究報告書』日本総合研究所，18，令和4年3月

図2　家族介護者・ビジネスケアラー・介護離職者の人数の推移



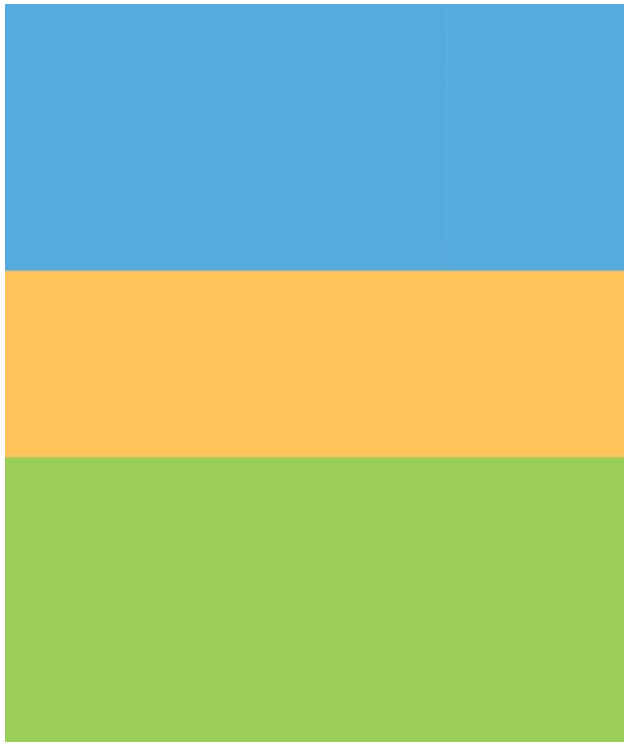
出典『新しい健康社会の実現』　経済産業省　2023年3月

境目を曖昧にすることで
対象を限定しない
→誰もが使える仕組み作り

重い

介護度

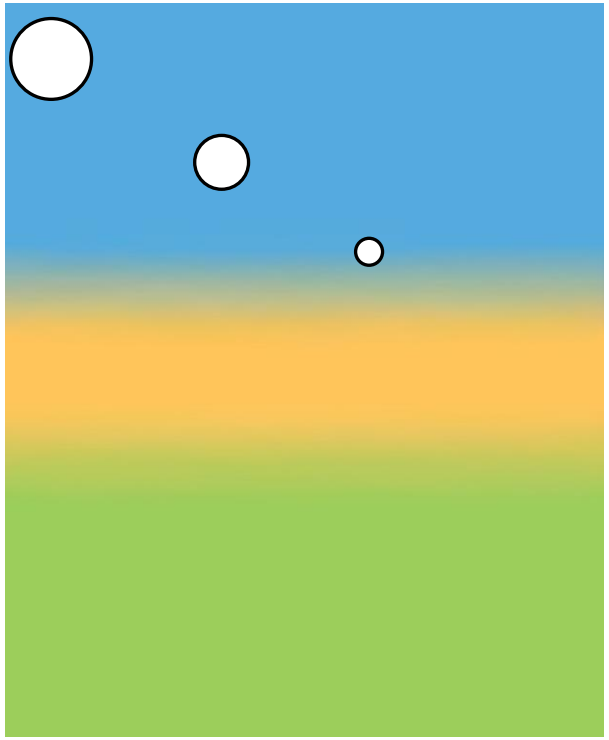
軽い

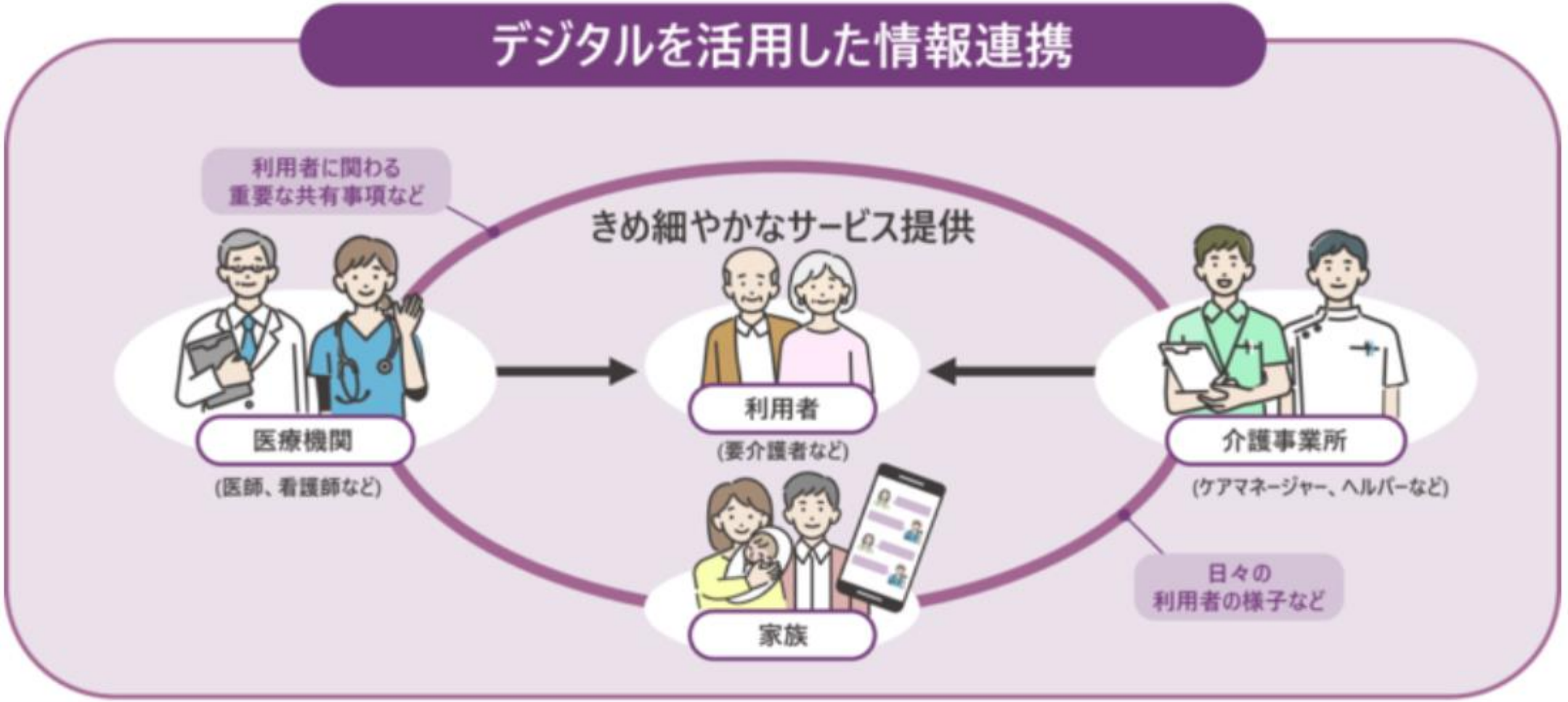


制度が整っている

制度の狭間

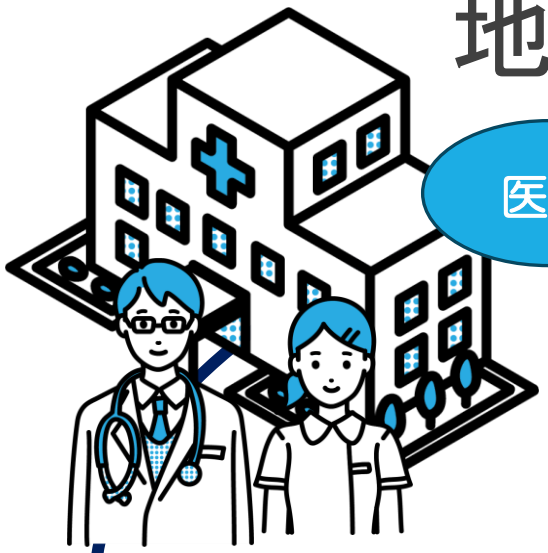
自分で対処できる





出典：日立市公式ウェブサイト次世代未来都市共創プロジェクトサイト　地域包括ケアシステムの構築

地域包括ケアシステムとは？



医療

日常の
医療提供

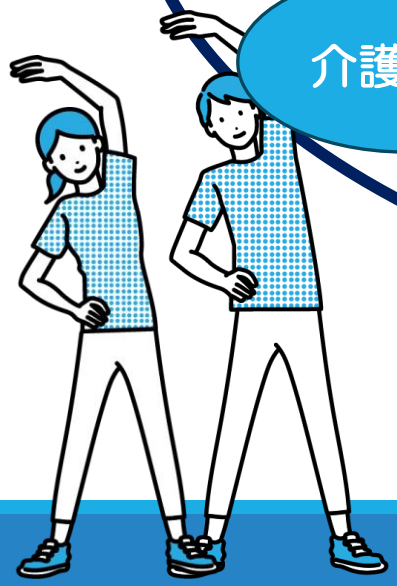
通院・入院

住まい

訪問介護・
訪問看護

通所・入所

介護

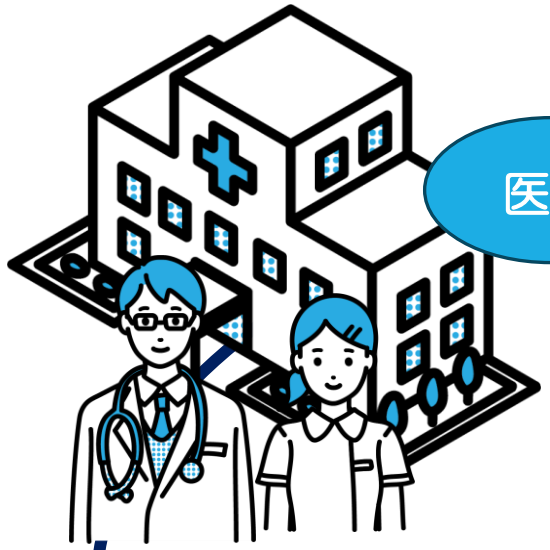


介護予防

自治会・NPO
ボランティア

相談窓口

地域包括
支援センター

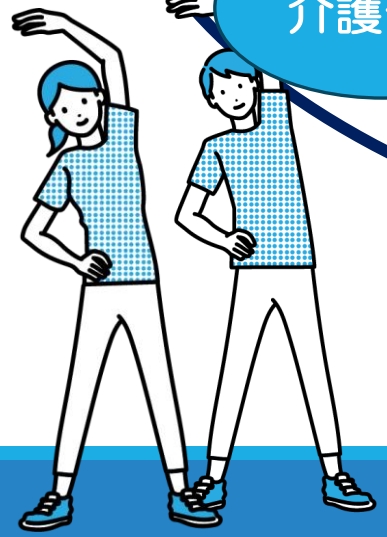


医療

住まい

介護

介護予防



ケアラーを含めた地域包括ケアシステム構築

相談窓口

地域包括
支援センター

研究方法

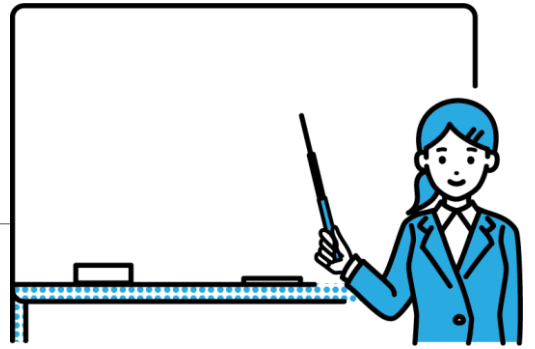
ケアラーの支援の提案を検討するにあたり、日立市内の現状について、以下の2つの観点からチームごとに現状と課題について整理、検討を行うこととした。

- 提案A：ニーズ発見の現状と課題について
- 提案B：マッチングの現状と課題について

【提案A】

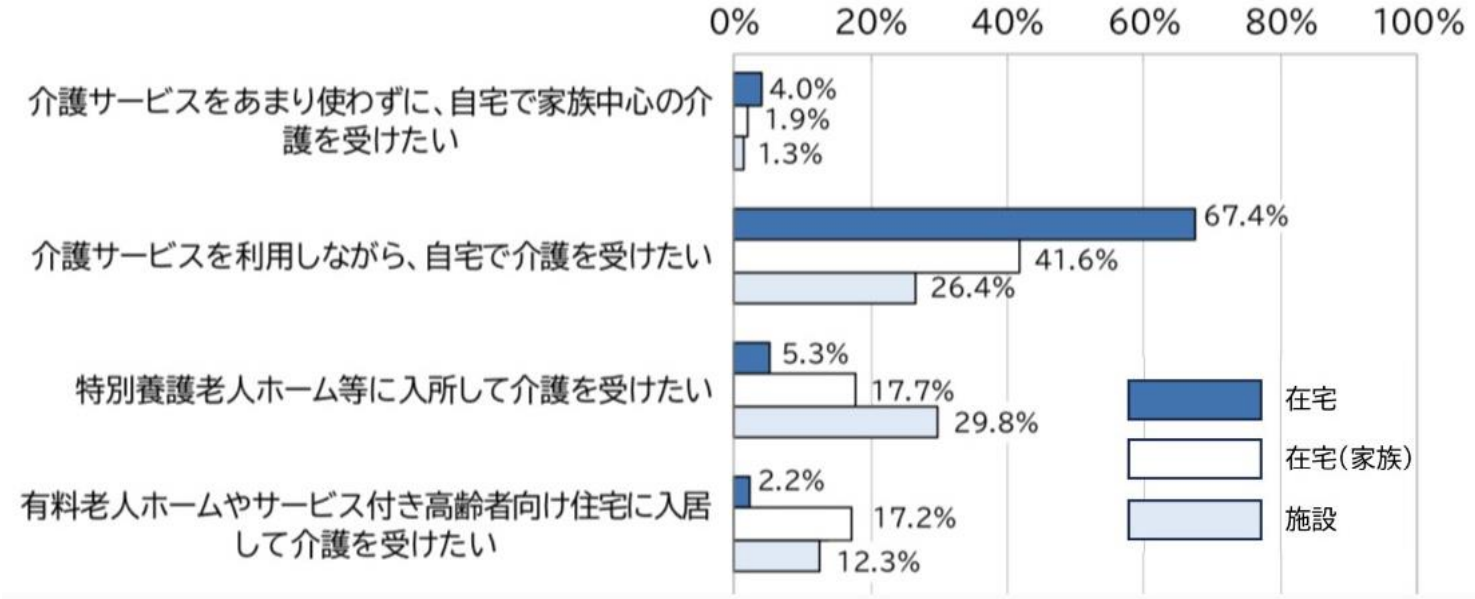
ニーズ発見の
現状と課題について

提案A （1）調査の経過



・日立市高齢者保健福祉計画2024を見ると･･･

『介護サービスを利用しながら
自宅で介護を受けたい』
と回答した市民が67.4%
→ケアラーが増えるのではないか



提案A （1）調査の経過

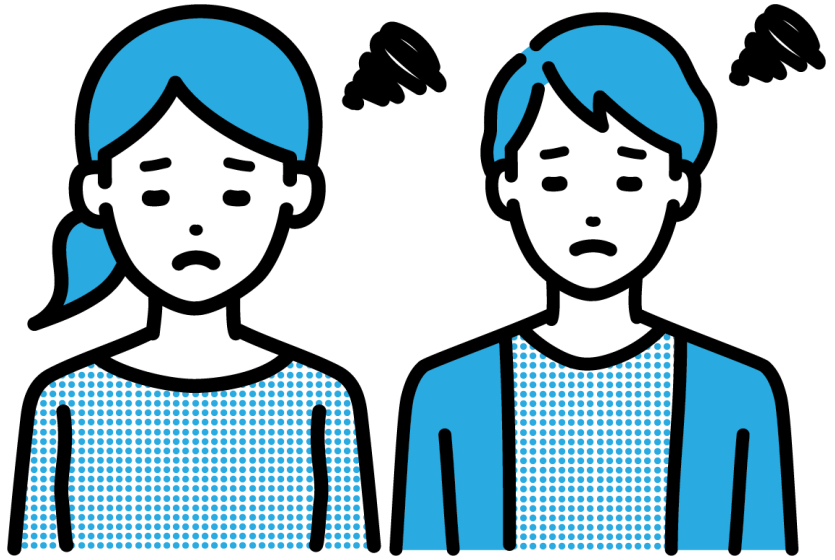
【目的】

◎ケアラーが支援を求めるきっかけにつなげる

【背景】

・自身がケアラーと自覚しにくい現状がある

・どこに相談すればいいか分からない



提案A （2）調査の結果

【インタビューから得られたこと】

①日立市役所　高齢福祉課（8月23日）

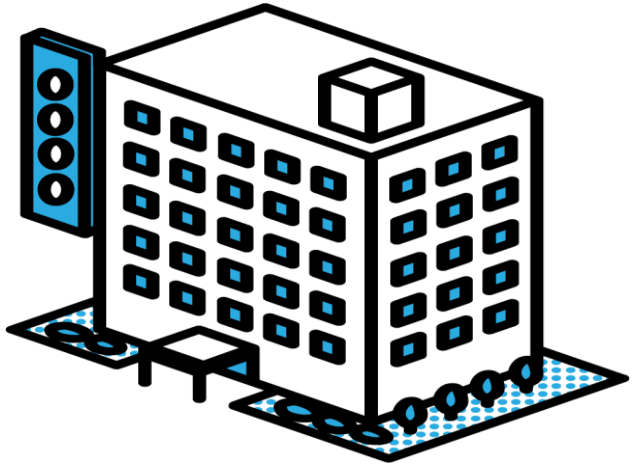
・市外、県外から入職する人が多いため核家族が多い

→気軽に助けてもらえる人が周りにおらず、孤立しやすい

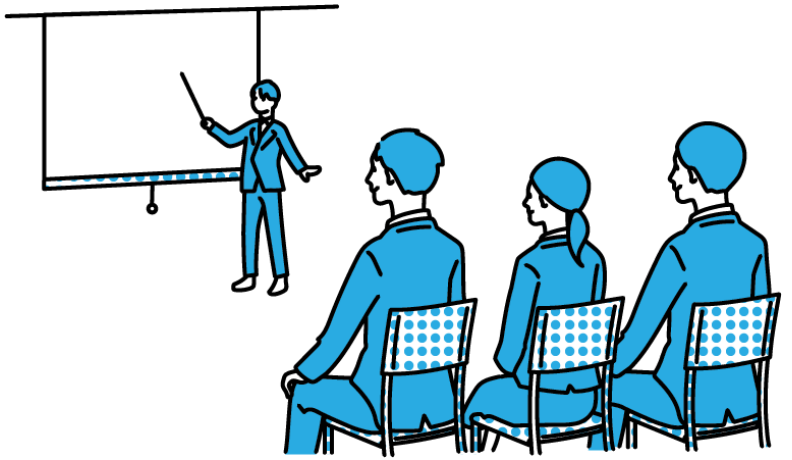
②日立市役所　子育て支援課（9月6日）

・ヤングケアラーになる基準が不明確なことや、自覚のしづらさがあるため、実態の把握が難しい

ケアラーの孤立や孤独感の課題があるのでは？



③地域包括支援センター 銀砂台（11月7日）



【インタビューから得られたこと】

＜相談者内訳＞

・年代：50～60代

・関係：配偶者、孫、甥、姪

・男女比：女性が多い

＜相談内容＞

・介護の方法

・介護保険制度について

→職員の体感で8割程度

＜相談できる環境や行事＞

・ひたちオレンジカフェ

内容：カフェタイム　体操・脳トレ・作品づくり
　　健康相談・物忘れ相談　参加者同士の交流

人数：多い時で12～13人（家族本人含み）、平均5～6人

回数：月に1～4回

運営：市内の各地域包括支援センター

・日立市そよかぜの会（認知症の人を介護する家族の会）

目的：認知症を発症した家族を介護する人々が集い
　　互いに交流や情報交換を行うことで、悩みを軽減
　　新たな気持ちで日常を過ごせるようになること

内容：定例会や誤嚥予防に関する学習会などの開催

→住民への認知が十分に広まっていない
　頼れる場所やつながりを増やすことが課題

提案A （3）提案の内容

◎気軽に悩みを相談できるLINEを用いたオープンチャット

・管理者：家族の会（仮）

・内容：

開設時は介護全般の相談ができるチャットを作る

⇩　規模が大きくなったら

種類（制度・疾病）ごとに分ける

（例）介護保険制度、認知症、がん、脳卒中、高次脳機能障害など

○オープンチャット　例

＜メリット＞

・どこでも気軽に相談できる

・当事者同士で悩みを相談
しあえる

・管理者からも適切な情報を
得られる

（間違った情報が広まることを防ぐ
ために、地域包括支援センターの
職員の方も管理者としてサポート）

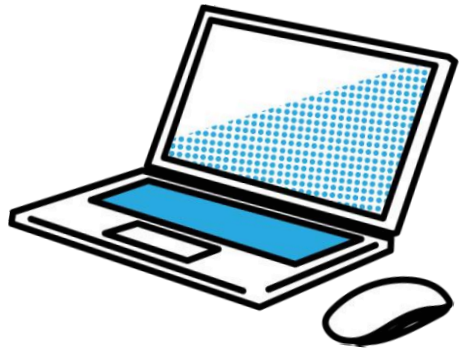
【広報の仕方】

・日立市の公式LINEで情報を掲示する

・市報やHPに掲載

・市役所や市内の病院にポスターを掲示する

・福祉施設や事業所にチラシを配る（家族の会など）



SNSの活用に慣れている人と
慣れていない人で
広報の仕方を変えるとより効果的

【提案B】

マッチングの現状と課題について

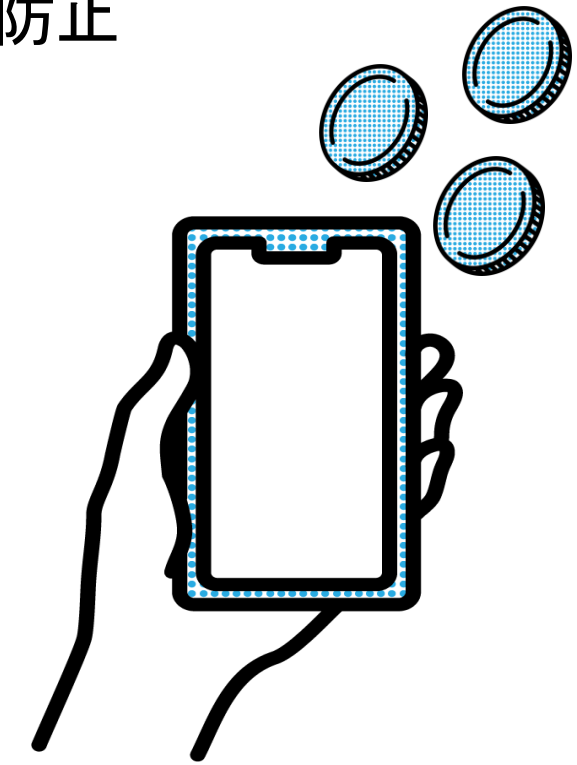
提案B　（1）調査の経過

【目的】

〇地域住民同士が密接にかかわり、コミュニティの希薄化を防止

〇住民同士で福祉的支援のマッチングを行う

→「まちのコイン」を活用できないか



【背景】

・共働きに伴うヤングケアラー、ビジネスケアラーの増加

・制度の狭間にいる人が声を上げにくい現状

・ボランティアや町内会等の繋がりの希薄化

提案B　（2）調査の結果

①日立市役所　コミュニティ推進課（8月19日）

・まちのコインは「お金で買えない楽しさ」がコンセプト

・まちのコインの現金化は不可能

②日立市社会福祉協議会（9月20日）

・個人のニーズは異なるため個別化した支援が求められている

・個人同士の繋がりはプライバシー面で課題がある

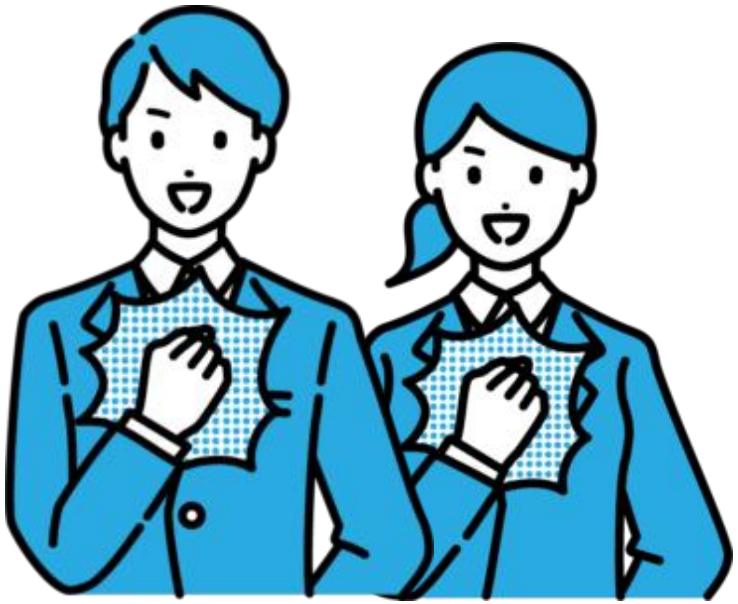
③日立市役所　福祉総務課（10月30日）

・市役所での取り組みにまちのコインを導入することは可能である

提案B（3）提案の内容

◎まちのコインを活用した住民同士の福祉的マッチング

・対　　象　　者　　制度の狭間にいるケアラー
・サービス提供者　ボランティアの学生
・主な内容：公的なサービスでは賄えない支援を提供
　　例）ゴミ出し、買い物代行、見守り、送迎など
　　→地域ごとに募集



〈地域活性化に繋げるサービス利用の仕組み〉

①コインを貯める

・ケアラーが日立市や社会福祉協議会が主催のイベントに参加する
　例）きずなBOX、認知症サポーター養成講座など

・ケアラーがまちのコインアプリ内の「まちのクイズ」に挑戦してコインを貯める
　→日立市役所、地域包括支援センター等が介護に関するクイズを作成

②大学が学生ボランティアを募集

③ケアラーが学生ボランティアによる支援を受ける

④学生が地域のスポットでコインを利用する

＜先行事例＞

○群馬県　ボラスルン

・ボランティアマッチングサイト

・自分の興味関心のあるイベントに参加できる

・県が主催のため、ボランティア団体も参加者も安心

○NPO法人ナルク　ナルクひたち

・活動するとポイントが貰え、年を取ったらポイントを使って福祉サービスが受けられる

・法人が無くなってしまった場合、ポイントは使えないため無駄になってしまう

→数年後に使うのではなく、リアルタイムで利用できれば解決するのでは？

〈考えられる課題〉

・スマホの操作に不安がある高齢者などはどのように利用するか

→社会福祉協議会や地域包括支援センターがサポート

・サービス利用者と提供者間のトラブルが起こり得る

→サービス完了の証明写真を撮影し、

社会福祉協議会や地域包括支援センターが承認

・目的外の意思を持ったボランティアが来てしまうおそれがある

→ボランティアは主に学生が対象、学校が把握しているため、プライバシー面も安心

まとめ

提案A：気軽に悩みを相談できるLINEを用いたオープンチャット

提案B：まちのコインを活用した住民同士の福祉的マッチング

ケアラーを含めた地域包括ケアシステムをもとに、
住民同士で支え合う仕組みを構築する

ご清聴ありがとうございました